

漁業者を志して

伊江漁協青年部 新垣和信

1. 地域及び漁業の概要

私たちの住んでいる伊江島は、本部半島の北西約9キロメートルの海上に位置し、島の総面積は2,288ヘクタールで人口5,659人余りの離島である。漁業協同組合員は正組合員103名、準組合員58名、計161名である。漁船隻数は1トン未満船33隻、3トン未満船84隻、5トン未満船10隻、5トン以上1隻、計128隻の漁船が沿岸漁業を営んでいる。漁業種類は、底延縄、一本釣、曳縄、イカ釣、小型定置網漁業等、多種多様な漁業をその時期に合わせて操業している。

(図-1) 昭和56年度の漁獲実績は872トン、水揚金額にして3億3百万円で島の経済を支える第1次産業として、大きな役割を果たしている。その販売ルートは、漁協で一括完全集荷し島と本部町を結ぶフェリーで運び、トラックで那覇に直送し、県漁連市場でセリにかけその精算を漁協の窓口で行う徹底した共販体制がとられている。

2. 組織及び運営

伊江漁協青年部は、漁村青年の親睦と漁業技術の向上、並びに漁業経営の安定を目的として、昭和53年11月に発足し、当時30才以下の漁協組合員及び組合員子弟である部員は、現在14名である。毎年不定期ではあるが、漁協中心に漁業技術研修会や沖縄県漁業後継者対策事業の一環である技術交流会等に積極的に参加し、生産技術の向上に努めている。

3. 課題選定の動機

本日は、私が漁船を購入し釣漁業後継者の道歩んで1年間、その短い体験から得たことを発表し、皆さんの御指導を仰ぎたいと思います。私は、昭和44年に学校を卒業しましたが、丁度高度経済成長政策等の盛んな頃で卒業生の殆んどは、不安定な漁業を嫌って都会へ職を求めて行き漁業への道歩んだ者は一人もいませんでした。私もその中の一人で、都会に憧れ那覇に出て、2年間都会の波にもまれながらの生活の中で夢を追ったが、46年3月頃から自分自身を振り返って見て「これで良いのだろうか、若者が全身で体当りする、若さを思いっきりぶつけることのできるものは何か」を自問する中では、反応もなくただむなしさだけが残りました。そこで昭和46年4月に伊江村に帰り、その後2年間は伊江漁協の実態に触れ、都会で考えていた自分の進むべき一つの方向が出来た。それは自分の手で漁船漁業を経営することです。

4. 実践活動の状況及び成果

漁船漁業を経営するためには、船の確保と技術の習得が必要である。若い者には、お金は無く一人立する技術ありません。そこで漁船の購入資金調達と技術習得のため、昭和50年から地元の底延縄及び定置網船に乗り組んだ当時の経営状況から考え、独立するまで7年間の目標を定めて計画を立てた。そして、その後将来自分が目指す釣漁業経営は底延縄釣を中心を考えるべきだとの結論に至り、その資金作りのため小型定置網漁業や、底延縄漁業のかたわら冬場の寒い時期

には、潜水器漁業を主体にモズク養殖漁業にも取り組むなど苦しみの連続であったが、苦しい辛い中にも夢や希望があり、都会生活では満たせなかった充実感があった。その期間中に暇をみつけて、必要な免許も取得した。そして7年余が経過した。この頃私の計画を伝え聞いた釣漁業の先輩の助言と漁業後継者に対する指導、援助で公庫資金借入の目途が付き、昭和57年3月早速長崎県へ行き、50馬力のFRP船(3.82トン)を購入し船名も第一戒丸と命名して、現在底延縄漁業に打込んでいます。では、次に漁船購入後6ヶ月間における私の漁業経営について紹介する。

(1) 燃費について

漁船漁業を営む上で大きな負担となるのは燃費である。このことは、他の漁業者も共通した悩みではないかと思う。従来は諸経費の約30%が燃費であったが、燃油価格の高騰により55年度あたりから45%~50%となっている。その燃料が今後とも高騰するのではないかとこの予測のもとに現在漁船のエンジンを調整し、速力を落す等して燃料の節約をしなければと目下実施検討中である。

(2) 使用漁具について

底延縄漁業はナイロン(150号)を幹縄にして、約800メートルであり、これに枝縄(250~280本)を2ヒロ間隔で取り付けてある。この漁法は、全国各地で行なわれている漁法である。しかしながら、底延縄の漁法は漁具を完全に海底に着けるためどうしても漁具の消耗が著しく、また対象漁種が底着性のタマン、ミーバイ類であるためその減少が見られるのも悩みの種である。そのために、去った8月頃から深海立延縄漁業に切替えた。同漁業は幹縄にPPロープ(6%)を使用し、枝縄の取付けは20尋間隔でその数は100本の枝縄に構成されている。

(3) 操業方法について

両漁法とも徹底した魚探々査を重点に、まず第一に潮流の加減を知ることが最も大切である。近くの漁場に同僚がいれば無線で連絡を取り、情報の交換をする。その時に潮流の方向等感違すると大変なことになるので注意しなければならない。水深は50m~200mである。底延縄の釣針は280本を付け、2カゴ分にして使用する。始めに2カゴを一緒に入れて、1時間位待ち時間をおいて、その後一カゴを揚縄をしてエサをかけ、投縄をしてから2カゴの揚縄にかかる。後は揚縄及び投縄の繰り返しの操業であり、一晩で8~10回操業する。この漁法は眠気との戦いでもある。普通3泊4日の操業であり、わずかな仮眠はとるが不眠、不休の操業であるため体力の消耗が激しいので食欲は旺盛でなければならない。また、現在操業している立延縄の水深は500m~700mとかなり深く、海底に着くまでの時間もきわめて長く、弱い潮流でも魚探のポイントとは違う所に流される等潮流が一定方向で同じ速さであれば一度は失敗しても次からはそのポイントに入れることが出来る。しかしながら、潮流は一定してくれないところに延縄漁業の難しさがあり、きびしさがあると思う。

(4) 漁場及び漁獲の概要

今まで私が操業した漁場は、北は宝島、南は宮古といずれも島近くの水深50~200mまでの

間で、始めの内は確かに魚も豊富であったが航海を重ねる毎に確実に魚は少なくなってきた。この現実を考えた場合、どうしても従来頭の中にある水深50～200 mを忘れ、新しい漁場または対象魚の切替えをしなければと考えていた。(図-2)そこで浮び上がったのが深海魚の「ムツ」釣でした。水深500～700 mの漁場であり、その漁場は50漣～60漣と近く従来の170漣～180漣も航海したのに比べると1/3の距離であるから、燃料の節減並びに時間的にも短縮されたと自負している。しかしながら「ムツ」漁業については今始まったばかりであり、実績はないが今後の課題として検討したい。また、同漁業については伊江島では誰もやったことがなく、漁場も海図には図示されてないことを特記しておく。漁獲高については、表にも示されるように出漁日数85日(4月～9月までの6ヶ月間)で水揚量5,039 kg、金額にして4,475,357円、その内の諸経費が1,483,642円で差引2,991,715円と約300万円の純利益となっている。(表-1)

5. 今後の課題

私たちの島は四面海に囲まれ、漁場はかなり恵まれているが、反面冬期の3ヶ月間は季節風が強く、出漁が思うにまかせないが12月～2月の時期に新しい漁場、魚種を求めてより効果的に漁獲を増やす等努力すべく考えている。また仲間同志との集団操業等、更には無線電話による好漁場の発見と連絡を密にしながら、操業体制を組んで現在までの447万円の漁獲をより以上に水揚をして、他産業に負けぬ所得を達成すべく計画しています。漁業を取りまく環境は厳しいものがあるが、都会に出た若者達が故郷に帰り、若者が一緒になって近代的な漁業、科学する、考える漁業に取り組むところに明日の水産業の発展と私達若者の生きる道があると考えています。

海は我等若人を待っていますので、長期忍耐の漁撈精神にのっとり勇気と実践をめざし、明日への前進を堅実に歩み続け、目標達成を期するよう一層の努力をする決意です。

漁業種類	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
底延縄漁	■											
イカ曳縄漁	■											
ハタ曳縄漁	■											
かつお曳縄漁	■											
追込網漁	▨											
飛魚網漁	▨											
小型定量漁	▨											
三枚刺網	▨											

図-1 時期別漁業種類

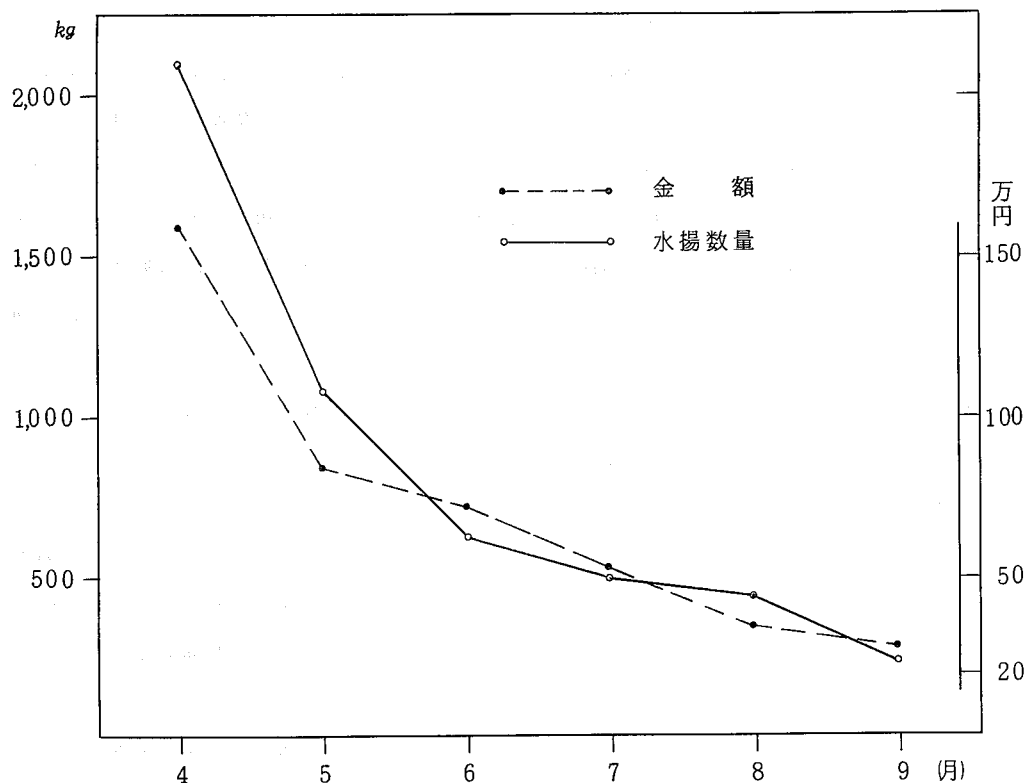


図 - 2 月別漁獲高

表 - 1 漁船購入後 4 月～ 9 月迄の水揚実績

6ヶ月間の水揚状況と漁法及び漁種							合計	
月 別	4	5	6	7	8	9	6ヶ月	
水揚数量 (kg)	2,064	1,066	688	500	476	245	5,039	
金額 (円)	1,608,775	936,132	776,695	538,240	356,565	258,950	4,475,357	
航海数	5	4	4	2	1	1	17	
出漁日数 (日)	20	16	16	8	15	10	85	
諸経費 (円)	281,317	243,645	237,126	347,324	197,200	177,030	1,483,642	
内 訳	燃料費	198,872	130,935	107,706	113,274	121,500	105,930	758,217
	水・エサ	33,500	74,210	93,000	46,800	33,250	41,800	322,560
	漁具消耗品	68,945	38,500	36,420	187,250	42,450	29,300	402,865
	その他	—	—	—	—	—	—	—
漁 法	立延縄、底延縄		魚 類	マチ類、ハタ類、白魚				

※ 諸経費の中で51%とが燃費となっている。

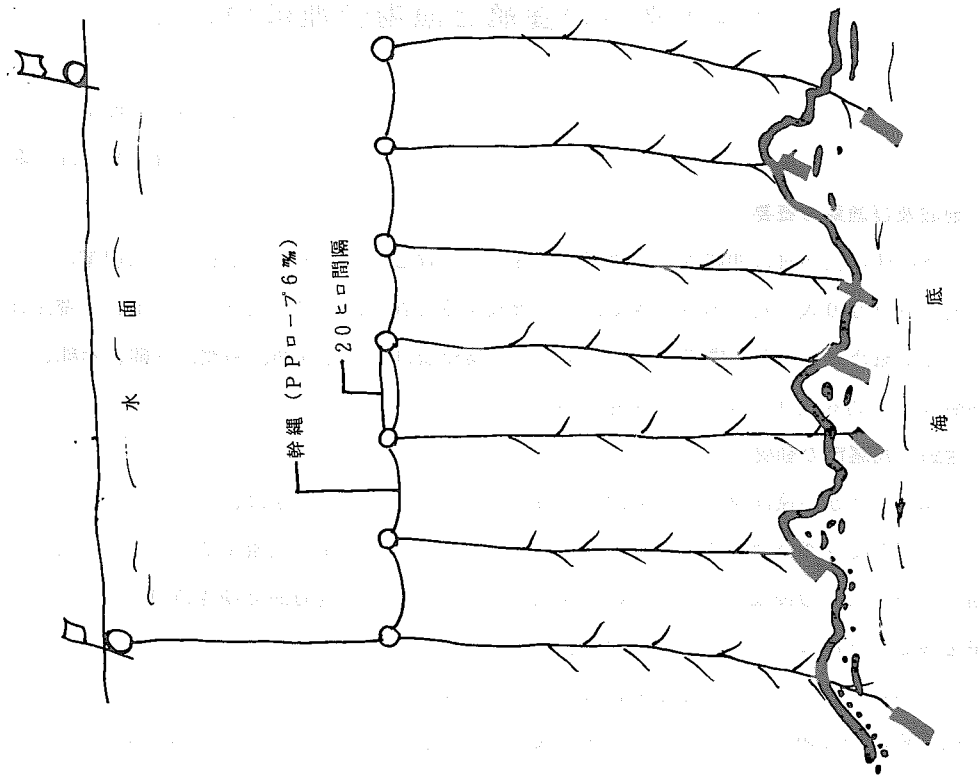


図-4 ; 深海立延縄漁具の構造

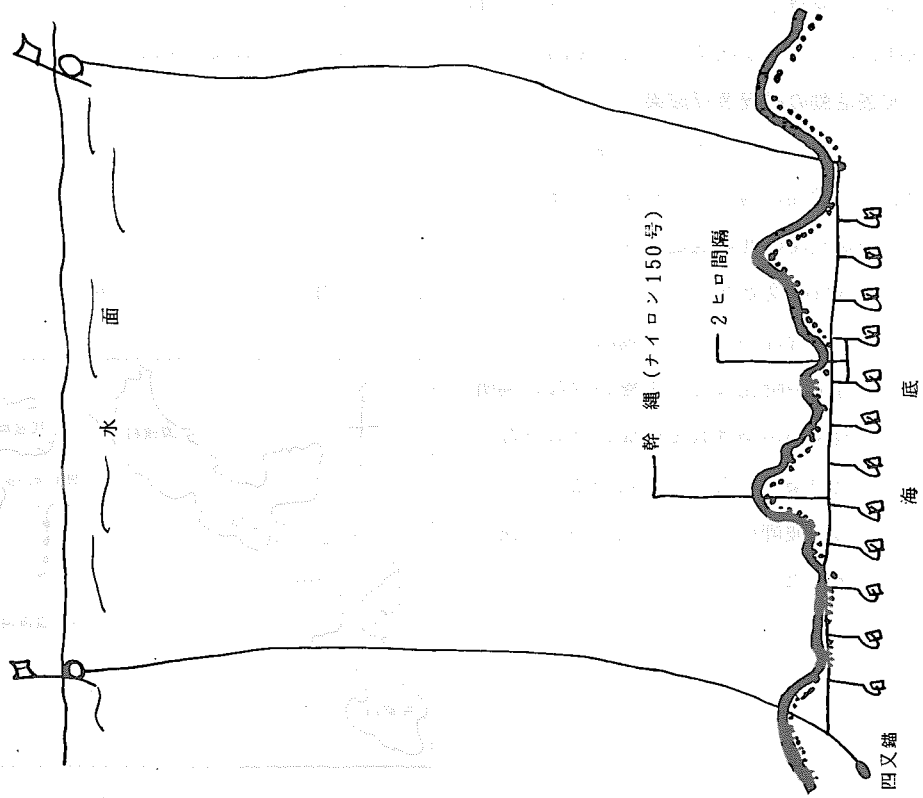


図-3 ; 底延縄漁具の構造